



## フィクションの哲学 虚構概念の哲学的分析

著者	清塚 邦彦
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301乙第9314号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00097002">http://hdl.handle.net/10097/00097002</a>

## 論文要約

### 目次

はしがき

序 論 フィクションを問うということ

- 1 フィクションという概念
- 2 虚構的な発言／虚構に関する発言
- 3 虚構的な対象の存在と非存在
- 4 本書の構成について

第一章 フィクションの統語論

- 1 二つの方向性
- 2 フィクションの目印となるもの
- 3 統語論的特徴の否定——カリーとサールの議論
- 4 より慎重な否定論——キャロルの立場

第二章 フィクションの意味論

- 1 フィクションは何も指示していないか
- 2 非現実の対象を指示すること
- 3 フィクションと真偽

第三章 フィクションの語用論（１）主張の差し控えと偽装

- 1 フィクションは主張されていないか
- 2 プラトン——他人の言葉を語ること
- 3 言語行為の退化あるいは偽装——オースティンとサールの議論
- 4 言語行為の表象——オーマン、ビアズリー、イートン、野家らの議論

第四章 フィクションの語用論（２）「フィクションを語る」行為

- 1 創造性と想像
- 2 グライス流の意図——カリーの理論（１）
- 3 事実との符合の偶然性——カリーの理論（２）
- 4 事実を記録するフィクション——カリー批判（１）
- 5 想像を指定するものは何か——カリー批判（２）
- 6 まとめ

第五章 フィクションの語用論（３）ごっこ遊びの理論

- 1 ごっこ遊びから表象へ——ウォルトンの議論
- 2 作品世界を伴う小道具としてのフィクション
- 3 カリーの議論との異同
- 4 まとめ

## 第六章 フィクションのなかでの真理

- 1 二、三の説明課題
- 2 不確定性と補充——ルイスの理論（１）
- 3 矛盾の問題——ルイスの理論（２）
- 4 カリーの信念説
- 5 ごっこ遊び説

## 第七章 フィクションの意義と意味

- 1 ウォルトンの自己批判——虚構性の定義への反例
- 2 絵画表象（描写）の理論における「分離」の問題
- 3 「分離」的な内容の役割とウォルトンの反例
- 4 表象内容の多層性

## 結 語

## 要約

本書では、まずフィクション概念の多義性を確認したのち、言語的な作品の一ジャンルとしてのフィクション概念に定位して、その解明を試みた。それがどのようなジャンルであるかについて予備理解を固定するため、序論では、作品に提示されている語りがその作者からは遊離するという事情に注目した。例えば、シャーロック・ホームズの物語はコナン・ドイルの制作によるが、そこで語っているのはドイルではなく作中人物のワトソン博士である、という具合に、フィクションの語りは作者の制作によるものではあっても原則として作者の語りではない。語りの技法の多様性に応じてこうした遊離現象にも多様な形があることは言うまでもないが、どのような形をとるにせよ、フィクション（虚構作品）とはこうした二重性の何らかの形態を呈している作品だというのが本書の基本了解である。

本書では、作者と語りの分離を生じさせている機構の解明を目指して、記号論の区分に沿って、統語論（第一章）、意味論（第二章）、語用論（第三章～第五章）という順序で考察を進めた。語用論に割かれた紙幅が特に多いのは、その重要性に関する本書の認識の反映であり、最終的に本書は、虚構概念の核心部分を、作品によって受け手に対して一定の想像が指定されるという事情に求める立場に賛同する。

ところで、第一章から第五章までの検討において主たる考察対象となるのは、虚構作品の本体を構成している発言、すなわち虚構的発言（fictional discourse）である。しかし、虚構に関わる発言にはもう一つ、虚構に関する発言（discourse on fiction）と呼ぶべき部類がある。それは、虚構作品が提示している内容（そこに描かれている世界）についての発言であり、多くは、作者以外による作品世界についてのコメントという形を取る。本書の最後の二つの章では、虚構に関する発言の真理条件を考えてみることで、作品世界という概念の帰趨について検討する。一定の作品世界をもたらすことは、虚構的発言の重要な特質の一つでもあるから、これらの検討は、本書第五章までの議論を補完する役割を担って

いる。

以下、各章の内容を章別にたどる。

## 第一章

第一章の課題は、作品の語りが作者からは遊離するという事態と関連する統語論的な特徴を特定し、その役割を見極めることにある。

本章でとり上げる一連の議論は、対照的な二つの陣営に大別される。一つは、フィクションの本文に、それがフィクションであることの目印となるような統語論的特徴（「虚構記号」「虚構性マーカー」）が見出されることを具体的に指摘しようとする、おもに文学理論家らの議論である。本書ではその代表としてドイツの文学理論家ケーテ・ハンプルガー、物語論の大家として知られるフランスのジェラルド・ジュネット、そしてアメリカの文学理論家ドリット・コーンの議論を取り上げる。対照的に、もう一方の陣営では、フィクションの目印となるような統語論的な特徴は原理的に存在しえないことが強調される。その典型例として以下にとり上げたいのは、アメリカの哲学者ジョン・サールをはじめとする一連の分析哲学者らの議論である。

本書は、作者と語りの分離という事態の由来を理解するには語用論的な事実についての考察が不可欠だと考える点では、分析哲学の伝統にしたがっている。しかし、語用論が重要であることの承認から、ただちに統語論的事実が重要でないことを導き出そうとする分析哲学者の慣例には、大きな問題がある。語用論的な事実の意味を正確に理解するうえでも、統語論的な事実を正確に理解しておく必要がある。（例えば、統語論的な手がかりをまったく抜きにしては、発話者の意図のような語用論的事実がいかんして知られるのかを説明することができないはずである。）

本章ではまた、作品の本体に見いだされる統語論的な特徴について検討する中で、そもそも作品とは何かという存在論的問題にも論及することとなった。本書では、ボルヘスの有名な小品を援用しつつ、作品の概念が、一定の歴史的文脈に準拠した解釈と不可分であるとする立場を支持する。

## 第二章

本章においてフィクションの意味論ということで問題にしたいのは、作品のなかで話題として指示されているのがどのような種類の対象なのか、またそれについて語られる内容が真か偽かという点に、作品の虚構性の理由を求めようとする考え方の是非である。以下では便宜的に、まず指示をめぐる考察、次に真偽をめぐる考察という順序で論述を進めていく。とはいえ、両者が密接に関連しあっていることは言うまでもない。

フィクションの特徴を指示と関連する事実を求める考え方は、子細に見ると幾通りかに分かれる。

- (a) フィクションには、対象を指示しない名前や記述が含まれる。
- (b) フィクションには、対象への指示を意図していない名前や記述が含まれる。

(c) フィクションには、実在しない対象を指示する名前や記述が含まれる。

本章では、これらはいずれも成り立たないことを論ずる。(a) について言えば、対象を指示しない名前や記述は非虚構作品にも登場するし、逆に、対象を指示しない名前や記述を含まない虚構作品もある。同様の指摘は(b)や(c)についても成り立つ。例えば、実在しない対象への指示を伴う非虚構作品もあれば(例えば、ドラえもんの作者の伝記にはドラえもんへの指示が伴うだろう)、実在しない対象への指示を伴わない虚構作品もある(ある種の歴史小説など)。

本章後半部の主題は、フィクションの本質を、それを構成する発言の真理値に求める考え方である。これにもいくつかの類型がある。

(i) フィクションは偽である。

(ii) フィクションは真でも偽でもない。

(iii) フィクションは(ある特殊な意味においてつねに)真である。

このうち、(ii)については第三章第1節で、(iii)については第六章で、それぞれ関連する議論を取り上げるため、本章では、(i)の是非を中心に論評した。

指示／真理のどちらの観点についても、本書の基調となるのは、フィクションには実在の対象への指示がごく普通に含まれ、また無数の真理が盛り込まれているという観察である。フィクションは、現実世界と対をなす概念ではなく、むしろ多くの点で現実世界に寄生している。それゆえ、フィクションを実在対象への指示や現実世界における真理と対立的な概念として特徴づける試みはうまくゆかない。こうした観点から一つの重要な争点となるのは、架空の対象への言及を一切伴わず、現実世界における真理以外のものを(少なくとも意図の点では)語らないようないわゆる「ノンフィクション小説」の類をどう考えるのかである。この問いに対する応答は、場合によるというものである。本書の立場では、この種の作品でも、その語りの点で作者と語りの分離という特徴が見いだされる限りは、フィクションとみなすことになる。(この点はのちに第四章でも改めて問題になる。)

### 第三章

第三章から第五章の主題は、フィクションの本性を、作品の提示のされ方や受けとられ方に求めようとする考え方である。本章では、こうした考え方を取る人々の多くが共有してきた二つの論点を取り上げる。ひとつは、フィクションにおいては発言がその額面通りの力を持たないとする考え方であり、しばしば、フィクションは何事も主張していない、と表明される(非主張説)。もうひとつは、フィクションにおいては言語行為が「偽装」されている、という論点である(偽装説)。結論から言えば、どちらもフィクションの特質を捉えることには成功していない。

非主張説について本章では二つの難点を指摘した。第一に、発言が虚構の文脈において変質をきたし、その額面通りの力を持たないというのは確かにその通りだが、それを指摘するだけでは、作者と語りの分離という事態についての啓発的な説明のためにはまったく不十分である。第二に、発言が主張を伴わないという指摘は、少なからぬ事例に関しては

端的に間違っている（ある種の歴史小説の類や、プラトンやバークリの哲学的フィクションの事例から明らかなように、フィクションにはしばしば主張が伴っている）。

偽装説については、本章では、プラトンの古典的なミメシス論を簡単に紹介したのち、現代の言語行為論者らの関連学説について紹介・論評を行った。その中で最も中心的に取り上げたのはジョン・サールの議論である。サールは、オースティンに由来する言語行為論の理論構成を引き継ぎつつ、虚構的な発言を、通例の発語内行為の偽装的な遂行として説明する。そこでは、通例の発語内行為が遂行されているように見えながら、その成立条件が意図的に侵害され、その効力が棚上げにされているのだとされる。

サールに対する本書の基本的反論は、虚構的な発言の本質をもっぱら発語内行為のレベルに求める説明には無理がある、とするものである。虚構的な発言は、すでにして発語行為のレベルにおいて、作者が発語していながら別人の発語として受け取られるという二重性を呈している。サール理論ではその肝心な点が取り逃がされている。

第三章ではまた、同じく言語行為論に依拠しながらサールに対する代案を提唱している一連の論者にも触れている。それらの議論についての本書の批判点は、それぞれが依拠している説明項（ミメシス、表象、引用、等）が多分に曖昧であり、被説明項の理解に資するものとはなっていない、というものである。

#### 第四章

前章に引き続き、第四章の主題も、虚構的発言に関する言語行為論的な考察である。虚構的な発言の本質をある種の「偽装」に求める考え方に対して、本章で取り上げるのは、それを主張や命令や約束といった言語行為と並ぶ独自の言語行為としてとらえる考え方である。なかでも、その方向での最も有力な見解として、本章では、コミュニケーション行為に関するグライスの洞察を後述するごっこ遊び理論と融合させたグレゴリー・カリーの理論について詳しく紹介し、批判的な論評を行った。

骨格だけを取り出せば、カリーの理論では、フィクションは、受け手が一定の内容を（事実として信じる代わりに）想像するという反応を意図して行われる発言行為の所産であり、たとえその内容が事実と符合していても、その符号が単なる偶然と見なされ得る限り、フィクションが成立する。

本章では、こうしたカリーの理論に対して大別して二つの観点から批判を行った。

第一に、読者の想像を意図した発話行為が、読者の信念を意図した発話行為と対照をなす行為であるかのようなカリーの捉え方は間違っている。一定の内容が現実であるかのような想像を行うことは、その内容がまさに現実であると信じることに両立する。作者側から言えば、読者に一定の想像を促すことは、その同じ読者に同じ内容の信念を促すことと、両立する。それゆえ、ある作品がフィクションであることは、その作品が事実に基づいていることや、そこに主張が伴っていることと、両立する。

第二に、ある作品がフィクションであるかどうかを考える際の基本的な着眼点は、その作品の内容を実際に想像の態度で読むことであるよりもむしろ、そのような仕方を読むべ

きことが指定されている、という事情である。そして、その指定は、カリーが想定したように作者の意図に由来することもあれば、むしろ作品そのものの言語的特性や、それを取り巻く社会的慣習に由来すると見るほうが適切な場合もある。それゆえ、作者の意図ばかりを優遇する理論構成は不適切である。

## 第五章

本章では、フィクション概念の基盤を受け手によるごっこ遊び的な想像に求める考え方について、その代表者ケンダル・L・ウォルトンの議論に沿って紹介・検討を行う。受け手側の想像という概念は第四章で取り上げたカリーの理論にも登場したが、その位置づけはウォルトンの理論ではやや異なっている。

ウォルトンが重視するのは、受け手側が実際に様々な想像を行うかどうかであるより、むしろ受け手側に一定の想像が指定されているという事実である。また、想像の指定が何によって行われるかという点についても、カリーの理論ではもっぱら発話者の意図という要因が重視されるのに対して、ウォルトンの理論では、発話者の意図に加えて、作品それ自体の持つ形状、さらには作品を取り巻く社会的な慣習という複合的な要因が重視される。ウォルトンの理解では、これらの複合的要因の役割は、子供のごっこ遊びにおけるごっこ遊びの規則の役割に相当する。泥を捏ねる行為が、泥パイ遊びの規則のもとで、ある虚構的な事実（パイを練る行為）を生成するのと同様に、三島の『金閣寺』を読む行為（それが実在の作家が書いた文章を読む行為である）は、三島の意図や作品の形状やその社会的文脈のもとでは、ある若い僧侶の手記を読むという虚構的な事実を生成するのである。

ウォルトンの用語法では、一定の社会的文脈のもとで一定の想像を指定するような事物のことが、ごっこ遊びの「小道具 **props**」と呼ばれる。泥団子や人形は子供のごっこ遊びにおける小道具である。そして、小説その他の虚構作品もまた、その役割の点ではごっこ遊びの小道具に他ならない。

ウォルトンは、これら一連の考察の根幹を、想像の指定ということにもとづく虚構性（fictionality）の定義に求めている。それによれば、ある命題が虚構的（虚構的真理）であるのは、その命題が成り立つという想像が、問題の作品それ自体のもつ形状やそれを取り巻く社会的文脈によって指定されている場合にほかならない。そして、虚構作品とは、ごっこ遊び的な想像を指定することをその社会的機能としているような事物のことにほかならない。

ちなみに、ウォルトンの理論では、このように規定される虚構作品（あるいは表象）の範囲は、小説その他の言語的作品を超えて、画像や劇作品などの視覚的作品も含んでいる。さらに言えば、これらの一定の作品世界を伴う作品群をも超えて、子どものごっこ遊びの小道具となる人形や積み木、さらには泥団子や切り株なども、表象としての性格を備えていることになる。本書では、この幅広い表象の領域の中から、ごっこ遊び的な想像の起点が言葉を読んだり聞いたりする経験であるような部類を、主たる検討対象とした。ウォルトン流のより包括的な表象概念（広義のフィクション概念）の是非に関する検討はまた機

会に譲らなければならない。

もう一つの限定として、本書では、ウォルトンが視野に入れている多様なごっこ遊びの領域のなかから、特に、一定の作品世界を伴う部類を重視した。泥団子や人形を小道具としたごっこ遊びはその都度、また人ごとに多様なごっこ遊び世界を生成するが、小説を小道具としたごっこ遊びの世界は、誰が演じる場合にも一定の内容を共有している。その共通部分が作品世界に該当する。

## 第六章

前章までで得られた特徴づけによれば、フィクション（虚構作品）とは、ごっこ遊びの小道具となることを機能としている事物であり、また特に一定の作品世界を伴うような事物である。本章と第七章の検討課題はこの作品世界の概念である。とりわけ本章では、「虚構に関する発言」の真理条件の問題をめぐる代表的な見解について概観する。論述に包括的な展望を与えるため、本章では、三つの対照的な視点に依拠した代表的理論を取り上げた。それらは、コミュニケーションの基本構造に沿って図式的に整理すれば、それぞれ、フィクションを提示する側、受け取る側、さらに両者が共有する世界、に考察の焦点をおくものである。このうち、作品を提示する側に定位した理論の代表例としてグレゴリー・カリーの理論、受け手中心の理論の代表としてウォルトンのごっこ遊び理論、さらに、共有された世界に定位した理論の代表例としてデイヴィッド・ルイスの理論をとり上げる。鍵概念だけを挙げれば、カリー、ウォルトン、ルイスの理論はそれぞれ信念世界、ごっこ遊び的想像、可能世界に依拠している。

説明の便宜上、最初にルイスの理論を紹介する。ルイスの理論は、可能世界に準拠するとは言いながら、作品世界を単純に一つの可能世界と同一視するのではなく、むしろ作品内の記述と整合する可能世界の集合、そしてその中でも特に現実世界と近い（あるいは現実世界と近いと信じられている世界の）集合として捉えるものである。ルイスの理論の大きな功績と思われるのは、作品世界の解釈がしばしば現実世界についての理解に（あるいは作品を生み出した時代の共有信念に）準拠して行われるという点について、《現実性の原則》あるいは《共有信念の原則》という名目で明確な理論的表現を与えた点である。この洞察は実質的な部分ではカリーやウォルトンにも引き継がれている。とはいえ、あくまで「可能」世界に準拠するかぎりにおいて、虚構作品においてあからさまに語られる矛盾の扱いについては、ルイスの説明には限界がある。

カリーの着想源は、作品世界という概念に関してしばしば指摘される不確定性や矛盾という特徴が、人間の信念内容に関して指摘される特徴でもあるという観察である。カリーはそれを踏まえて、作品世界の概念を、その作品の語り手に帰される信念内容として理解しようとする。カリーの理論の一つの難点と思われるのは、そこでは、虚構作品においてはしばしば明白な矛盾が語られるという事実を正当に扱えないことである。また、より根本的な問題と思われるのは、すべての虚構作品に関して「語り手」（あるいはそれを一般化した「内包された作者」）が存在するという想定に問題が伴うように思われることである。



ウォルトンの理論はごっこ遊びの概念に基づく。すでに第五章でも述べたように、ごっこ遊び理論では、作品世界とは、作品によって指定された想像の内容にあたるものであり、しかも、その作品の受容者に指定された想像内容の共通部分にあたるものである。ウォルトンの理解では、「シャーロック・ホームズは名探偵だ」のような虚構に関する発言は、ドイルの小説において読者にどのような想像が指定されているかを、そのサンプルを自ら発することで体現するような発言なのである。

本書の立場はウォルトンの展望に沿うものだが、それが作品世界という概念についての十分な説明になっているかどうかについては依然として大きな問題が残されている。本書では、最後の章で、ウォルトン自身の自己批判を手がかりとしながら、残された検討課題の中でも最も重要と思われるものについて考えてみる。それは結果的に、ウォルトン理論と本書の立場との分岐点を見極めることにもつながる。

## 第七章

ウォルトンは、Walton(2015))に収められた論文「虚構性と想像」の中で、本書第五章で紹介したかつての立場に関して批判を行い、理論上の軌道修正を行っている。要点を絞れば、《指定された想像》の概念に依拠したかつての虚構性（虚構的真理）の定義は、虚構性の必要条件の指摘にしかならず、未だ定義としては不十分だというのがウォルトンの指摘である。本章の一つの筋道は、ウォルトンのこの自己批判の試みの吟味を通じて、本書で追究してきたフィクション論の趣旨について補足と再確認を行うことである。

結論から言えば、ウォルトンの自己批判は、それ自体としてみれば誤解に基づく間違った議論である。しかし、そこには確かに、ウォルトン理論では十分にとらえきれない事情についての重要な手がかりも含まれている。それを明確化するため、本章では、ウォルトンの自己批判の議論を、画像表象（描写）の理論において「分離」という名称で論議されてきた現象と関連付けてみる。私見では、ウォルトンが問題視した事例は、じつは画像表象の領域において「分離」の名のもとで論議されてきた現象と同質のものである。これらの現象についての検討を踏まえ、最終的に本章の考察は、表象内容（あるいは作品世界）に関するウォルトン流のとらえ方への批判へと通じる。

「分離」とは、絵のもとに見ることのできる内容が、その絵に帰される公式的な描写内容には属さないという事情を指す。単純な例として、人の胴体や手足を一本の線で表わす単純な線描画を考えてみよう。この種の絵のもとには、手足と胴体が異様に細い棒状の人間の姿が見えるが、しかし、我々はふつう、線描画をそのような棒人間を描いた絵とは考えていない。それは普通の人間に関する省略的な表象である。

本書において特に問題にするのは、絵のもとに見える内容が、非常に多くの場合に、公式的な描写内容とは区別されながらも、描写内容の理解にとって重要な役割を演じるように見えるという事情である。例えば、セザンヌ《大水浴》を見る人は、そこに妙にグロテスクな女性の裸体像を見る。彼女たちの体の諸部分は大きさのつり合いがちぐはぐであり、部分部分が欠けていたりもする。しかし通例、そうした異様な見え方は描写内容の一部と

は見なされない。つまり、《大水浴》は決して異形の女性たちを描いた絵ではなく、普通の女性たちの水浴風景を描いている。だが、その異様な見え方はやはり《大水浴》の理解には不可欠である。それは、「何」が描かれているかには含まれないが、「いかに」描かれているかの重要な部分を構成している。

本書では、こうした事情を加味して、作品の表象内容という概念が多層性を持つという見方を提案する。作品の公式的な表象内容は、作品の見え方に加えて、そのタイトルや社会常識（ルイスのいわゆる現実性の原理や共有信念の原則）に準拠して特定されるが、作品の見え方は、必ずしもその公式的描写内容には制御されない。そして、作品の正当な理解のためには、公式的な内容の特定に加えて、それを一定の非公式的な見え方を通じて見ることが求められる。

この点は、単に画像の解釈でなく、言語的なフィクション作品にも拡大適用することが可能である。ある一連の出来事からなる物語を考えた場合に、我々は、主題となる出来事集合を共有していながら、語り口の点で異なる多くの物語を考えることができる。ある語りでは、一連の出来事が時系列に沿って語られ、別の語りでは、すべてが終わった時点から回顧的に語られる。また、ある語りは悲劇調で、別の語りはコミカルに、さらに別の語りはサスペンス調で語られる。さらに、メタファーを多用した装飾的語りもあれば装飾を避けたそっけない語りもある。これら一連の語りはどれも同じ出来事群を語っているという点では作品世界を共有している。それが、公式的な表象内容である。しかし、それを特定するだけでは、それぞれの語りの理解としては不十分である。それぞれの語りを正しく理解するには、その内容をそのつど一定の「与えられ方」を通じて理解しなければならない。ただし、それらの「与えられ方」の記述は、公式的な表象内容の記述とは矛盾をきたすようなものでありうる。（第七章の表題は、この「与えられ方」をフレーゲ流の *Sinn* に見立てたものである。）

芸術作品をもカバーしうる表象内容の理論のためには、内容が複数の（少なくとも二つの）層を持つことへの配慮が不可欠である。本書は、その点の確認をもって結びとなる。